

而して此田園に關し且つ其免税に關しては、太后の女官長ロター「*Lotia*」が命に依つて證明した下文が引渡された事をも記してゐる。かくて此銘文の末尾には其下知文の引渡された月日及び此銘文の書かれた月日と認められる年月が記されてゐる即ちそれには兩者共に二十四年とあるから、前の銘文よりも十年の後に刻せられたものなる事が推察せられるのである。此銘文に於て注目すべき事

は、*Tirahni* 山と云ふ事を記してゐる事と、此洞窟がサータカルニー王の寄進に依つて掘開せられたものなる事を推測し得られる點にある。即ち此二銘文は共に *Satakarni Gautamiputra* に關するもので、此洞窟も此王の寄進に成つたと推測せられ得るので、此毘訶羅を *Gautamiputra* 窟と呼ぶに至つたのである。

利瑪竇の『萬國全圖』と『幾何原本』に就て

理學博士 小川 琢 治

利瑪竇の『坤輿萬國全圖』が京都大學の所藏に歸し歴史地理第七卷(明治三十八年)に其一部分を複製してから、日本では此の圖は少しく學者間に知られた。然るに歐洲では此の圖の存在は久しく知

れずに過ぎ、*ロックハート*の一八五八年倫敦地學協會に寄贈せるものが漸く一九一七年に至りベツドレー氏により發見されて *Geographical Journal* 一九一〇年十月號に紹介された。ベツドレー氏の論文

にはヒューッド氏の地圖研究を添へて、此の地圖の底本に關する意見も記載され、ユール大佐が Geographical Magazine 1774 併にブリタニカのリチー傳に載せた再造圖の全く間違つたことが始めて明にされた。

リチーが萬曆十年(一五八二年)澳門に著いて肇慶府に暫く止つた間に世界圖を作り、其後萬曆二十八年南京に來つて第二の世界圖を作り、三十年北京に入つて第三の圖を作つたことは『坤輿萬國輿圖』の題辭(第四幅)に據つて明かである。ベツドレー氏は殊に此の最初一五八四年肇慶府で作つた地圖がリチーの自叙傳開版者ブエンツリ氏の説の如く今ミラン府アムブロシアナ文庫の藏圖ではなからうといふ考證に頗る苦心を費し、又た此の傳記に載せた建安王に贈つた地圖もブエンツリの説の如くリチーの肇慶府で作つた最初の圖でなからうと辯じて居る。然るにベツドレー氏も亦たり

チーの作つたものと考へて研究して居るのは多分誤謬らしい。同氏の英譯と其の引用した伊太利原文とから推測すれば建安王に贈つた二書の一たる『全世界誌』*Description di tutto il mondo universale*なるものは多分龐迪我 *Pantoja* の『海外輿圖全說』二卷として『明史』藝文志二に收録されたものと思はれる。利瑪竇の著書として地理に關する書は明史に見えず、又傳はつても居らぬから、リチー一行が贈つたのが此の龐迪我の地理書であつたところが寧ろ妥當の解釋である。従つてリチーが三回作つた地圖の何れでもなく、恐らくは艾儒略の『職方外記』に挿んだものゝ如き拜み合せに二頁大に描いた地圖で、五大洲各一區一幅になつたものであつたらうと思はれる。

ヒューッド氏はリチーの作圖と稱せらるゝアムブロシアナ文庫の世界圖の輪廓に就き頗る綿密な研究を試みた中に、南米洲の西岸からオルテリウ

スやメルカトルの一五七〇年頃に示した瘤の如き突起の除かれたのに注意して、此の圖が一五八四年のリチーの作圖とすることに躊躇したのは一應の理由は認められる。然れどもリチーが和蘭及びフランドルで出來た地圖のみに基いたとする事は出來ぬ。何といつても當時の歐洲に於て海上に先づ發展したのは西葡兩國で耶蘇教會の諸人は之と提携して世界全體に布教せんとしたのであるから

第一手フリストバンドの報告は其手に入り易いは勿論でオルテリウスやメルカトルよりも早く正しい諸大陸の輪廓を知つたと考ふべきである。第十六世紀の後半に尙ほ伊國製圖家は其の先進者としての地位を維持した事實も之と共に考ふべきで、昨年余のライプチヒで獲た伊國製地球儀の如きは此の時期に於ける一代表物で、同じく南米洲の西岸の輪廓は正しく描かれて、其他もリチーの一六〇二年世界圖と大同小異である。リチーの圖を作るに當り携帶し

た種々の材料を集成したことは題辭に明かで、此の如き地圖から特に作製したとすれば、オルテリウスやメルカトルの世界圖と出入するのは敢て怪むに足らぬ。リチーの最初の地圖に「出所携圖冊、與其積歲札記、紬繹刻梓」といひ壬寅（萬曆三十年）版の現存地圖には「取倣邑原圖、及通誌諸書、重爲攷定」といふのは單に當時帶來其の輿地圖を其まゝ翻譯したのでない明證である。

リチーが初めて西洋の天文及び教學の知識を東洋に傳へた記念物として『幾何原本』は其の『萬國全圖』と共に重要なものである。此の書は地圖が支那に於て殆ど全く影を絶ち、モリソン等が極力搜索して終に發見せなんだのと反對に、清朝になつて其の翻譯が盛んに行はれ、會國藩の同治四年南京で補譯して出版したもの、光緒帝勅版の『數理精蘊』初帙に收めたもの等がある。

此の『幾何原本』なる題號の意義は幾何學の原理

といふ事で、其の底本はリチーの所謂丁先生で歐
几里得の著書で「先生於此書、覃精已久、既爲之
集解、又復推求、續補凡二卷、與元書都爲十五卷
又每卷之中、因其義類、各造新論」といふもので

而して丁先生がクリストフナルス、クラブキウス
Christophorus Claviusであることは疑がない。何
故に此の人名を丁の一字に縮めたか不明であるが
リチーが羅馬で學んだコスモグラフィアは當時基
督教徒間に最も重せられて、グレゴリウス第十三
世の命により新曆法を造つたクラブキウスで、其
の著書としてユークリッド十五卷に増補一卷を加
へたのが一五八九年羅馬版としてブリュネーの
『書籍寶典』Manuel de Libraireに載せられて居る
から、其の人たる推定の動かぬ譯である。此の『幾
何原本』が獨り盛に行はれたる理由の一はリチー
の口授を筆記した徐光啓の名で、支那學者間に重
きを成したことであらう。Geometry が測地學と

譯さるべきを幾何學として行はるゝに至つたは利
氏が其の計算の基礎の學たるを高調して名けた最
初の譯語が其まゝ襲用されたのである。